

## 大蔵流茂山家狂言台本翻刻（三）

### 『布施無経』『蝸牛』『神鳴』『縄綯』『金津』

坂本清恵・飯田むぎ・杉本さくら

〔要旨〕平成二十六年年度に日本女子大学文学部日本文学科で入手した大蔵流茂山千五郎家の狂言台本二十七冊のうち、茂山社中、橋本治夫の署名や印のある『蝸牛』『神鳴』『金津』『縄綯』と、新たに令和五年に入手した真一の署名と「茂山文庫」の印のある『布施無経』を翻刻した。

茂山真一は三世茂山千作で、現在の茂山千五郎家狂言一八四曲を整理したが、当該書も同様に大正末から昭和初期の茂山千五郎家の狂言を書き留めた資料である。

「キーワード」大蔵流茂山家狂言台本、「布施無経」、「蝸牛」、「神鳴」、「縄綯」、「金津」

日本女子大学文学部日本文学科日本文学科では、平成二十六年に大蔵流茂山家に関わる狂言台本二十七冊を購入し、これまで大学院の授業で検討を行い、『千鳥』『狐塚』『入間川』『末廣かり』『鶏猫』『二十九十八』『呂蓮』『長光』を翻刻した<sup>1)</sup>。今回は、令和五年に追加購入した『布施無経』と、既購入の『蝸牛』『神鳴』『縄綯』『金津』を翻刻する。

既購入資料についてはすでに紹介したが、『布施無経』も一八四曲の茂山千五郎家の現行台本を整理した茂山真一（明治二十九年～昭和

六十一年）のものである。先に購入の台本と同様の体裁で、表紙には「茂山文庫」の朱印が押されている。表紙と本文共紙の紙縋り綴本（縦12cm横16.5cm）の八行本で、既購入分よりやや小さめである。おそらく同時期に書き留められたものであろう。

現行の茂山千五郎家の狂言台本としては『布施無経』の翻刻はないが、『蝸牛』は、小山弘志『日本古典鑑賞講座 謡曲・狂言・花伝書』（一九五八年 角川書店）、『神鳴』『金津』『縄綯』は北川忠彦・安田章『新編 日本古典文学全集 狂言集』（二〇〇七年 小学館）に翻刻がある。しかし、刊行された翻刻本文は、三世千作書写台本に手が加えられており、日本女子大蔵本とは本文に異同が見られる。日本女子大蔵本は、三世千作のまとめた台本の元の姿がうかがえる可能性もある。

翻刻に先立って、簡単に表記と本文の特徴について記しておく。

## 一、表記について

漢字と平仮名の本文であるが、一部片仮名も用いられている。発音に  
関わる表記上の特徴についてまとめておく。

## ① 促音表記について

促音は、後から本文に添えられることが多く、促音が書き足されない  
ままのものもある。橋本治夫のものは、脇に小さく「ッ」と添えられ、  
茂山真一のものには、「ツメ」と書き添えられるものもある。

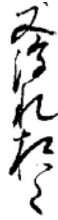


「引たくって」『縄綱』十三ウ8

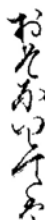


「ひツメきよう」『布施無経』二十二オ5

いずれも促音を後から書き込んだと思われる。次は「おった」、「おそ  
なわって」の促音が書き添えられていない例である。



「又浮れおた」『蝸牛』十四ウ6



「おそなわては」『布施無経』二ウ5

## ② 連声表記

謡本のように連声の発音についての細かい指示はないが、連声による  
発音と思われる以下の表記がみられる。



「布施物を」『布施無経』一ウ6



「布施物を」『布施無経』五ウ6

促音系連声で「布施物を」を〈フセモット〉と発音するよう「を」に  
鉛筆で「ト」の書き込みをしている。これは後から連声表記をしている  
が、他の例は連声を仮名で表記している。



「布施物た。」『布施無経』十五ウ5



「布施物と。取ふと」『布施無経』十七オ7

それぞれ「布施物は」「布施物を」を〈フセモッタ〉〈フセモット〉と  
いう連声で発音することを、注記なしで発音どおりに「布施物た」「布  
施物と」で表記している例である。これと同様の例が十七オ3、二十オ  
8、二十ウ8で、『布施無経』のテーマ語ともいえる「布施物は」「布施  
物を」に対して促音系連声での発音が伝えられたのであろう。

同様の促音系連声が表記されてもよいと思われる「明月は」・「今月は」  
二十二ウ4は連声表記がされていない。なお、該当部分の虎寛本では「明  
月は」でなく、「来月は」を〈ライゲッタ〉と発音注記がみられる。

なお、『布施無経』十オ6には「今朝物いわず別離の家」の「離」に「チ」  
が鉛筆で書き入れられている。「別離」を〈ベッチ〉と発音することを  
示している。「別離」が〈ベツリ〉ではなく、〈ベッチ〉と発音されてい  
たことになり、それを〈ベッチ〉としたのである。「出来」が〈シュッ  
ライ〉から〈シュッタイ〉と「ら」と「た」の調音点の近さからの交代  
がみられるのと同様であろう。

撥音系連声も振り仮名ではなく、発音のまま平仮名表記をしている。



「金銀米銭な思召」『布施無経』八オ2

「米銭は」を〈ペイセンナ〉と連声で発音するところをそのまま「米銭な」と書いている。

### ③長音表記

助動詞「う」の付いたかたちのうち、取り上げるのは次のものである。

あど踊ふ、  
ちと踊ふ

「ちツと踊やふ」『金津』八ウ7

「ちと踊よふ」『金津』九オ3

こちらは「踊ろう」なるところだが、「踊やふ」、「踊よふ」とも〈オドリョー〉の発音をこのように表記したものであろう。「踊る」は五段動詞でこれに意志の助動詞「う」がついて〈オドロー〉となるところである。「見う」を〈ミョー〉とするが、「おどり」に「う」がついた〈オドリョー〉を中世的なものとしたと思われる。過剰なる類推形とできよう。なお、ここでも最初の例には「ちツと」と促音「ッ」の書き込みがあるが、次の例には「ちと」だけで促音が示されない。

### ④「昨日」について

『金津』には「昨日」を「けのふ」（三ウ7・四ウ3）とした例がみられる。

## 二、翻刻

本文の翻刻にあたっては、以下のとおり処理をした。

- ・節付けのある部分については、胡麻章が施された部分に傍点を付した。
- ・「未だ」はすべて「未だ」であるが、「未だ」で翻刻をおこなった。

・『布施無経』に書き込まれた役柄など、朱の書き入れは「」に入れ示した。本文の左に朱で書き込まれたト書きは〈〉で囲んで本文行に翻刻をした。また、『布施無経』は最終的に鉛筆でのミセケチと書き入れがあり、鉛筆の書き入れは《》で示し、入れ替えの指示も採用した。他曲についても書き入れがあれば同様である。

なお、『縄綯』は、太郎冠者が主人に、縄を綯いながら仕方話をする場面からの本文である。『金津』は、子供の金法師を地蔵に仕立てるところからの本文である。

### 翻刻『布施無経』

〔本 出家〕 二十八

〔茂山文庫〕印

〔本神文〕

大蔵流

布施無経 六義

【表紙】

布施無経

〔仕手〕是は此辺りに。小庵を取結ぶ貧僧で御座る。爰に誰殿と申て毎月定て定齋<sup>（ト）</sup>の方が御座るが又今朝乍去難い御方より。御齋を被下ふと有て。再三の御使で御座たに依て。先夫へ参り齋をも給へ。重満致いては御座れ【一オ】共。定齋の方では。嘸待兼ていられ外ふ程に。是より参り勤メ計り成共致ふと存る。先そろりく<sup>（ト）</sup>と参ふ。イヤ誠に。貧僧の重齋とは。能ふ申た物で御座る。定齋の方では。毎月定て。十疋の布

施物<sup>(ト)</sup>を被下るゝに依て。チト御断りも申憎【二ウ】う御座る。イヤ参る程に早是じや。先案内を乞う。(案内常通)「主」エイお寺様。最前から御坊の御出を待ておりました。「仕手」定てそふで御座るふ。今朝去難い御方より。お斎を被下ふと有て。再三の御使で御座たに依て。夫へ参り。斎をも給へ【二オ】重満致いては御座れ共。此方は定斎の事で御座るに依て。定て待て御座るふと存じ《近頃》おそなわては御座れ共動計り成共致ふと存じ。参《つたことで御座有》り舛した。「アド」ヤレく夫は近頃忝ふ御座る。最早斎は仕舞舛したれ共。お勤計【二ウ】成共。被成て被下い。「仕手」夫ならば通り舛る。「アド」サアくつうと通らせられい。(仕手ト入違ヒ名乗座へ来ル)未作「仕手」加様の時分人を持舛せぬに依て。御断りも申越ひで、近頃気の毒な事で御座る。「アド」左様の節はそも苦敷ふ無い事で御座る「仕手」ハ、ア是は又持佛は仕舞わ【三オ】ずに置せられ舛たの。「アド」此方《のいいで》と存じ其俣で置まし舛「た」「仕手」ハ、ア此方はきれいい好じや。持佛の角から角迄。塵一本も御座らぬ。近頃寺恥敷い事で御座る。「アド」在家と申物は只むざくと計り致した物で御座る。「仕手」更ば勤メを始め舛【三ウ】「アド」(着サスル正向キ居ル)夫は御苦勞ニ存舛る。「仕手」南無し、ん婦命礼。西方ニヤモくくく。(仕手ノ咄ス度ニ仕手ヘアシライヌ又正向ク)エ御家内は皆替らせらるゝ事も御座らぬが。「アド」御蔭で皆息才で御座る。「仕手」夫は目出度ふ御座る。ニヤモくくく「イ」毎ぞやは見事な菊の花を被下て、忝ふ御座る。「アド」不【四オ】出来には御座れ共。庭前ニ咲舛したに依て。進上申て御座る。「仕手」折節来客が御座て「生て置舛したれば」殊の外はれ《い》致いで御座る。「アド」夫は何よりで御座る。「仕手」ニヤモくくく。あれが御庭前ので御座れば。春に成て。苗を被下い。愚僧が眠蔵の庭へ【四ウ】ふ。《伏せ》布施て。

置度ふ御座る。「アド」《何がさて》進ぜ舛ふ。「仕手」頼舛る。「アド」心得舛した「仕手」ニヤモくくく。南無きやらたんのう虎やく／＼エヘン。左様なれば。勤メは是で仕舞舛る。「アド」夫は忝ふ御座る「仕手」(仕手ト入違ヒ大臣ノ方ヘ行ク)もう斯参り舛る。「アド」何と御茶でも参らぬか。「仕手」イヤも茶【五オ】もほしう御座らぬ。是から寺へ戻て。ふ。布施《伏せ》り舛ふ。「アド」夫はとも角もで御座る。「仕手」更はく「アド」能ふ御出(笛上ヘザス)被成舛した。「仕手」エ。是は如何な事。毎も定て十正の布施物を被下るゝにけふは何の沙汰も御座らぬハ、ア是は定めて忘れさせ【五ウ】られた物で有ふ。イヤ毎も被下るゝ物を。今日被下れぬと申て苦敷ふ無い事じや。先急ひで戻ふ。が。惣じて人と申者は。我勝手の能い時は物言例に成たがる物じや是が例に成ては迷惑致す立戻て。思ひ出さるゝ様ニ【六オ】申て見ふと存る。イヤ申く御座り舛るか御座るか。「アド」ハ、アお寺様は未だ行かせられぬそふな。(大臣へ出ル)イヤ申く御坊は未だ御出被成舛せぬか。「仕手」もう斯参り舛るが。是は此方ニは毎ぞや教化が聞度いとな仰られて御座るな。「アド」如何にも【六ウ】左様申て御座る。「仕手」最前も申通り。是から寺へ戻れば。【只】最單伏す分の事で御座る若おひまならば。教化して聞せ舛ふか。「アド」夫は忝ふ御座る何卒(又仕手ト入違ヒ名乗座へ来り直ス)御教化被成て被下い「仕手」乍去か様の事は。御心障りが有ては悪う御座るが。信実。【七オ】御用は御座らぬか。「アド」イヤ最早しまい上で。何も用は御座らぬ寛りと御教化被成て被下い「仕手」夫ならばろくにいて。咄し舛う。「アド」夫が能ふ御座り舛ふ「仕手」扱教化と申て。別《に六ヶ敷い》成事でも御座らぬ。只後生を願へと申分の事で御座る《アド有難ふござる》此方程果報な【七ウ】御方は御座らぬ。先家居は廣ふ住せらるゝ。金銀米銭な思召俣に有。御子達も数多御座《る》



わふがの。「アド」如何にも御座る。「仕手」すれば此世の願はぎツメと。

《かのうた》すんだと申物で御座る。「アド」イヤ／＼左様では御座らぬ。只《今日を》今申をうか／＼と送る分の事で御座る。「仕手」イヤ／＼。

惣じ「八才」て人間の身の上の願と申物は限りの無い物で御座て。名利

名聞におぼれ。欲に欲を重ね《今日只足を知らぬが人間の定で御座る》

後生をも願わず。申うか／＼と暮すは浅聞敷い事で御座る。《アド有難

うござる》《仕手》生者必滅と申て。此世へ生する物は必滅すと云事を。

皆人毎に口にはいへ共正敷我身の上に有を知「八才」らぬ《はかない浮

世でござるによつて》が人聞の情で御座る。《只後生を願はせられたが

ようござりましょう。》「アド」有難ふ御座る。「仕手」又人間の命の果

無い事は。<sup>（かぜ）</sup>風の前の燈火。水の上のあわ。雷光朝露。石の火よりも。

まだ果ない。人間の命で御座る。既に朝開暮落杯と申て。朝旦の花にも。

たとへ置れて御座る。朝旦と申物は「九才」《花はきれいでござれ共》

早朝に開き。日の出るに従てしほみ。夕辺には。ほろりと落る人間も此

事く。けふ有て。あす無い命。出るいき。引くいきを待たぬ。果ない浮

世で御座るに依て。只後生を願わせられたが能ふ御座り外ふ。「アド」

有難ふ御座る。「仕手」扱又爰に殊勝な文「九才」が御座る。是をも話

いて聞せ外ふ「アド」承り外ふ。《此詞に成ルト 正面へハズス「仕手」身命財

を<sup>ナゲウツ</sup>御て傳法せんと欲せば。供佛施僧捨心の<sup>（モツバ）</sup>専とせよ。雲となり雨

となり。不晴／＼の字今朝物いわず別離の家。（小笑）と申ては。チト

御合点が参り外るまい。「アド」如何にも合点が「十才」参り外せぬ。「仕

手」是をチト和げて聞せ外ふ。「アド」夫は有難ふ御座る。「仕手」身命

財を御てとは身は此身。命はいのち財はたからと書た文字で御座る。「ア

ド」ホウ《へエ》「仕手」佛の為には身をも命をも財をも投打て。後生

を願へと申事で御座る。「アド」有難ふ御座る「十才」「仕手」傳法せん

と欲せばとは。此法を傳ふるを吉とす。供佛施僧とは。或は卷塔迦藍を

建立し。佛に香華を手向け。我等如きの貧僧に。物を施すを施僧と申。

イヤ申施すとは。人に物を遣る事で御座るぞや。「アド」左様で御座る。

「仕手」捨身「十一才」の専とせよとは。身をすて行と書た文字で御座

る。《アド へエ》身を捨てと申て。何も此身を洩川へすつるでは御座

らぬ。佛の為には「雨が降ふが風が吹ふが」といふとわず行でなければ

ば捨身の行とは。申され外せぬ。「アド」有難ふ御座る。「仕手」雲と成

雨と成りとは。定り定まらぬ「十一才」事。不晴／＼の字。イヤ申此不

晴／＼の字が。今日教化の一肝文で御座る。もそと《これへよつて》専

をすまいて能ふ《とくと》聞せられい「アド」心得外た「仕手」ふせい

／＼の時とは。晴やらす晴やらざる時と。書た文字で御座る。「アド」

ホウ《へエ》「仕手」此晴やらすは悪い事で御座るに依て晴やツメた「十二

才」が能ふ御座る。「アド」ハア。「仕手」惣じて人と云物は。定てもろ

ふ事の有れば。又定て遣る事の有物で御座る。「アド」如何にも有物で

御座る「仕手」御座るわふがの。「アド」如何にも御座る「仕手」未

夫をやらぬが晴やらざる時で御座るに依て。遣るべき物は。何の二念も

無ふ。早ふ晴「十二才」遣たが能ふ御座る。「アド」ハア「仕手」又も

ろふ者も。毎も被下るゝに。けふはなぜ被下れぬぞ。若忘れさせられた

物では有まいかも出しそふな物じや／＼と。色／＼の罪を造るも《是

皆罪業と申してやる方の》是は。皆此方の罪二なる事で御座る《るに依

つて早うはれやつたが良うござる》「アド」左様で御座る。《アド 心得

ました》「仕手」斯う「十三才」申。此方と。愚僧の間二も有そふな事

では御座るわふらぬか。「アド」如何も有そふな事で御座る。「仕手」御座

るわふがの。「アド」如何にも御座る《りましょう》「仕手」夫／＼。夫を

遣らぬが。則晴やらざる時で御座るに依て。思ひ出いたならば。何の

二念も無ふ。早ウ晴遣らせられた【十三ウ】が能ふ御座る。「アド」心得舛した「仕手」何と此不晴の<sup>レ</sup>時が御合点参り舛たか。「アド」如何にも合点致いて御座る。「仕手」イヤ。未だ御合点参らぬ御貞じや。「アド」とくと合点致いて御座る。「仕手」イヤはさへ合点参れば。外ニ申事は御座らぬ。下手の長【十四オ】談儀は。高座の<sup>サマツテ</sup>防とやら申今日<sup>レ</sup>は是にてしまい舛る「アド」夫は有難ふ御座る。《仕手》此跡は寺へ御座れ。緩りと話いて聞せ申ふ。《アド》《又仕手ト入達ヒ大臣ヘ》何と御茶でも参り舛せぬか「仕手」イヤも茶もほしう御座らぬ。更ば。《アド》能ふ《笛上ヘザス》御座た。「仕手」ハア。ハツメア引。世には愚鈍な人も【十四ウ】者は有物で御座る。手を持って引まわし。箸を以てくゝむる様ニ申せ共。只合点した。くゝあれば。何を合点召された事じや知らぬ。少しも御合点参らぬ程にの。ハツメア引南無阿弥陀佛くゝ。恐しやくゝ愚僧は迷ふた。うけがいぬ【十五オ】れば。ごんり致す。うけがはざれは長く生死に落る。元より一錢一毛無きをこそ。禪の眼とほしたり。<sup>タト</sup>縦は彼十疋の布施物た。真中より。ぶツメつゆと捻切り。大海へさらりくゝと流いて。有もなう無もなうして行くに。何んの行か【十五ウ】れぬ事も有まい。恐らくは。いんで見せふ。(小笑)ア、行かれぬく。後から引戻さるゝ様で中く行かれぬ。又行かれぬも道理じや。先十疋の布施物た押頂き。左りの袂へ押入。半分ニては。塩味噌。薪を調べ。半分ニては【十六オ】座禪ふすまのつくろいをし、夫を引潜ひて。来し方行末の悟道<sup>サトルミチ</sup>を開ふ物ならば。何か有らん。其上此十疋の布施物た申請<sup>マカ</sup>いでは。今日縫も亡者も奈落へ沈み。愚僧も。目の前で。損の行く事じや。夫く佛も《方》法便と申事を。説いて【十六ウ】置かれた。アノ様な人に。教化立てを致ふより。此上は《方》法便を以て。彼十疋の布施物た取らひで置ふか。惣じて布施無い経には袈裟を落すとやら申。

愚僧も袈裟を落ひたと申て。布施物と。取ふと存る。エヘンく。果合点の【十七オ】行かぬ。何とした事じや知らぬどれへ往た事じや知らぬエヘンく「アド」《立チ》イヤ御寺様の声が致す。イヤ申く御寺様。御坊は未だ御出被成れ舛《大臣ヘ出ル》せぬか。「仕手」チト尋る物が御座るかまわせられるな。どれへ往た事じや知らぬ。「アド」イヤ申く何を尋ねさせらるゝぞ「仕手」去れば【十七ウ】其事で御座る。最前教化致す時分は。袈裟<sup>ケサ</sup>を懸ていた様ニも有又下ニ置た様ニも御座たが是見させられい。袈裟が御座らぬ。「アド」誠に御袈裟が御座らぬ「仕手」此方ニは御子達が数多御座るに依て。自然いたづらに隠させられた物で御座るふ。もし出【十八オ】舛したならば。早速寺へ届て被下い「アド」畏て御座る。「仕手」《それに付》愚僧の袈裟ニはまがいも無い印が御座る。「アド」夫は又如何様な御印で御座る「仕手」巻付《されはその事で御座る》アノ鼠と申奴は徒らな奴で御座て。此間去る《方》寺<sup>カタ</sup>へ齋に参り。戻て其袈裟を棹に掛けて置て御座れば。如何様マ物ニ【十八ウ】たとへと申そふならば。鳥目十疋程の鼠が。あちらへはするりこちらへはするりと。通る程の穴をあけて置舛した。私の事で御座るニ依て。夫をまかまわす其俣かけて《参つ》歩<sup>マ</sup>術て御座れば或る旦方衆の御内儀が見られ舛して。イヤ申く御寺様。御【十九オ】坊の御袈裟は。余り見とむなう御座る。どれく童が縫て進ぜ舛ふと仰られて。則夫をうら表よりふ。布施引。縫とやらにしてくれられたが。まがいも無い愚僧の袈裟<sup>カサ</sup>で御座る。出舛したならば。早速寺へ届て被下い「アド」何が扱畏て御座る。「仕手」愚僧は【十九ウ】もう斯参り舛る。「アド」イヤ申く御寺様チト待せられい。「仕手」何も用は御座るまい。「アド」先待て被下い。「仕手」心得舛した。「アド」《大臣柱ノ方向キ》是は如何な事最前から御寺様が。さいく小戻りを召さるゝと存じて御座れば。毎月定て

十疋の布施物た進ぜ舁るを。今日はは「二十才」たと失念致いて御座る。イヤ苦敷ふ無い事じや。急びで進上申ふと存る「仕手」漸々と思ひ出れたそふな。〔笛上へ行キ扇開キ（布施物）ヲノセテ大臣へ出ル〕「アド」イヤ申く御寺さま御坊ニチト面目無い事が御座る。「仕手」夫は又如何用な事で御座る。「アド」去れは其事で御座る。毎月定て。十疋の布施物と進上致し舁るに「二十才」今日は来客に取まぎれ。はたと失念致いて御座る。近頃おそなわては御座れ共。何卒納めさせられて被下い。「仕手」ハ、ア面目無いと仰らるゝは。其事で御座るか。「アド」中く。「仕手」ハア扱く此方は又。りちぎな御方じや毎月被下るゝに今月二限て「二十一才」被下ぬと申て。夫を愚僧がいなと申舁ふぞ。其事で御座れば愚僧はもう斯参舁る。「アド」イヤ申く御寺さま。毎月進上申に。今月二限て進上申さいでは。心ニ懸て悪敷ふ御座る。何卒納めさせられて被下い。「仕手」其上。今日はチト申受悪い事が「二十一才」御座るか。「アド」夫は又なぜで御座る「仕手」去れば其事で御座る。最前から教化致ふか。又は袈裟は落ては御座らぬかと。さいさん小戻りを致すも。ひツメきよう其御布施が。ほしき引。「兩人」（笑）「仕手」と。思召と迷惑に存舁る。愚僧はもう斯参り舁る。「アド」イヤ申く何しに「二十二才」其様な事を思ひ舁ふぞ。平二（是ヨリ兩人押ヤイラスル）納めさせられて被下い。「仕手」夫ならば又明月一緒ニ申受舁ふ。「アド」イヤ申く明月は明月。今月は今月で御座る。是非共納めさせられて被下い。「仕手」どう有ても今「日は」月は申受られ舁るまい。「アド」〈布施物ヲ仕手ノ懷中ヘネジ込ミ中ノ袈裟ヲ引ズリ出シ左手ニ持チ大臣へ戻リ不審只ヲ仕手へ渡ス〉其儀ならば。御懷中へ入て進ぜ「二十二才」舁ふ。「仕手」イヤ是は迷惑で御座るく「アド」イヤ申く御寺さま。是は御坊の御袈裟では御座らぬか。「仕手」どれく是へ見せて被下い。（笑）是に付て。不思議な事が御座る。「ア

ド」夫は又如何様な事で御座る。「仕手」今月は最前から出憎い御布施が出「二十三才」舁たれば。こりや袈裟迄が出舁した。「アド」アノ《ようおいでなされました》やくたいな、とツツと、衍かしめ。「仕手」《南無阿弥陀仏く》面申も御座らぬ。

「仕手」

一無地のし目 着流 一長衣

一無地腰折 一角頭巾

一袈裟 一黒珠 珠数

一白骨愚繪 中啓

「アド」

一 長上下 出立

一 御布施

【二十三才】

茂山眞一 花押

【裏表紙】

翻刻『蝸牛』

【本神文】

大藏流「改正」

蝸牛 六義

【表紙】

蝸牛

次第「仕手」〔次第道行〕旅寝（大小の方向キ）の衣露受けてく目覚めし後やしをるらん〔地返〕（地返）（ナノリザ立）是は出羽の羽黒山より出為懸け出

の山伏です 此度大峯葛城をしまい 只今本国へ罷り下る先急ひで参ろふ。『道行』イヤ【一オ】誠には萬行有りと申せ共取分け山伏の行は野二伏し山に伏し。あるいは岩木を枕とし（仕手柱ニテフリ返り真中へ出大臣柱ヲ右 其奇特には。空飛ぶ鳥を（手サシ文句通り形スル）も目の前へ。祈り落す（直シ）是が山伏の行力です（ナノリザへ戻り）イヤけさ宿をそふく立たれば。いか【二ウ】う眠むう成た（三足カリ見廻ス）當りにまどろむ所は無か知らぬ。（笛ノ上ノ方向キ）イヤ是に大きな敷が有る（珠数懐中し）さらばはいつて見う（右手カケ足ヌキ左手カケ足ヌキ右へ飛見廻し）エイくヤットナハ、ア引涼しそうな敷じや先此當りでまどろもふ。（大臣柱ニテ左向キ横ニ寝ル手枕ニテ）エイくヤットナ。【主】是は（ナノリザ立）此當りに住居致す者で【二オ】御座る 某長命の祖父を一人持て御座るが猶長寿ささ度ふ存所に。或人の仰らるゝには。蝸牛カタツムリと申物を参らすれば。猶長寿ハ疑ひ無いとの事で御座るニ依て先太郎冠者を呼出し 蝸牛を取りに遣ふと存る（同）【二ウ】う眠むう成た當りにまどろむ所は無か知らぬ。イヤ是に大きな敷が有るさらばはいて見うエイくヤットナハ、ア引涼しそうな敷じや先此當りでまどろもふ エイくヤットナ。是は此當りに住居致す者で【三オ】御座る 其長命の祖父を一人持て御座るが猶長寿ささ度ふ存所に或人の仰らるゝには 蝸牛と申物を参らすれば猶長寿疑も無との事で御座るニ依て先太郎冠者を呼出し。蝸牛を取りに遣うと存る（呼出し）【三ウ】汝を呼出すは別成事でも無い。そちも知る通り 祖父子様二も段々御長寿被成れ。何とく目出度い事では無いか 御意被成るゝ通り。御目出度い御事で御座る 夫よく 扱夫二付猶々長寿致させ度ふ存處【四オ】或人の仰らるゝには蝸牛と申者を参らすれば。弥々長寿疑ひ無いとの事じやに依て 汝は大儀乍其蝸牛を取て来い 畏ては御座れ共。其蝸牛と申物はどの様な物で。又どこ元二有る事やら。

終見た事も【四ウ】御座らぬ。其蝸牛と申物は先第一頭が黒ふて腰に貝を付け。又折々は角ツノを出す物じや 大きは人程も有ると云ふ敷には必ず居程二先さくとして取て来い 是は六ヶ敷い御好では御座れ共せんさくとして【五オ】取て参り舛せふ 内もいそが敷い早ふいて頓て戻れ。心得舛た エイ引 ハア引（主板ツキへ座大臣ハズシ）扱もく 俄な御用を仰付られた参らずは成まい。（カンガへ）先どの敷へ参ろふ イヤ（直シ）此村はずれに大きな敷が有二さらば先あれへ【五ウ】参ろふイヤ（道行）誠ニ参ても敷に蝸牛が居れば能ふ御座るが若しおらぬ時は参た先も無い事で御座る（大小ノ前ニテ立）イヤ何かと申内（形スベテ仕手ニ同断）早敷へ参た。先はいつて見う エイくヤットナハ、ア引（見止シ必ズ仕手ノ方見ルベカラズ）涼しそうな敷じや先此當り【六オ】（上下左右ト跡ハサハ見廻ス）頭の黒い物はいぬか。腰に貝を付けた物はをらぬか。又折々は角を出す物はいぬか（仕手ニツマツキフリ返見テ）是（ナノリザへ戻り）は如何な事あれ二何者やら寝て居る。見れば頭が黒ふ御座る若しや蝸牛殿では無いか。チト起いて問ふて見う（仕手ノ跡口へ片ヒザ）イヤ申く【六ウ】（仕手ヲユリ起ス）チト物が問度ふ御座る 起て被下い（両手ノビシ 目コスリ起上ル）ア、引能う寝た事哉（太郎元へ戻ル）（太郎ヲ見テ珠数出シ）エイ今起たはそちか。如何にも私で御座る身共を起いて何とする そつじな申事乍若しや此方は蝸牛……殿では御座らぬか。【七オ】何じや蝸牛では無いかと申か申く して其蝸牛を尋ねて何とする。私の頼ふだ者は長命の祖父を一人持て御座るが猶々長寿致させ度ふ存所或人の仰らるゝには蝸牛と申物を参らすれば【七ウ】猶御長寿疑ひ無いとの事で御座るニ依て其蝸牛が取て進ぜたさに。か様に尋ぬる事で御座る ム、子細を聞けば尤じや暫く夫二御待ちやれ。心得舛した（仕手ハズシ）（笑）世にはうつけた者も有れば有物で御座る【八オ】某を見懸けて。蝸牛では無かと



申（カンガエ）よい／＼某が蝸牛じやと申て。き奴を散々なぶてやるふと存る。（太郎ヲ見向き）イヤ能く／＼おいやるか。是に居り舛る。そなたは眞実蝸牛を尋ぬるの。眞実尋ね舛る。何を隠そ【八ウ】ふ身共でおりやる ヤア／＼すれば此方が蝸牛殿で御座るか中／＼（仕手下カラ見上ル）成程大きいは。人ほども有ると申て御座る 先其のかたつむりと申物は頭が黒ふて腰に貝を付けた物じやと申て御座る。夫は近頃念【九オ】の入た尋ね様なれど。（左手ト巾ヲサス）先お見やる通り形の如く頭は黒いでは無いか 誠に（見ル）黒う御座る貝は今見するぞ。（トフリ返り右腰の貝ヲ見セル） 早ふ見せて被下い 夫レ／＼／＼／＼ヲ、（見ながらヨル）、、、何と貝で（直シ）有ふがの 見事な貝を付させ【九ウ】られた又折／＼は角を出す物じやと申て御座る 何角中／＼（正向き 左右ヘカヘガエ）角／＼／＼ム、角も今見するぞ（トフリ返り片ヒザ付キ鈴懸両手デ突上ル）早ふ見せて被下い。 夫／＼／＼／＼ヲ、（見ヨル）、、、何と（直シ）角で有ふがの。見事な角を立【十オ】てさせられた疑ひも無い蝸牛殿で御座る 何卒私の方へ来て被下い 夫は成まい 夫は又なぞて御座る。此頃は方／＼に蝸牛が流行ツて約束の方が数多有二依てエイ行かれまい。では御座り舛せふが【十ウ】是で御目二懸たも定めて他生の縁で哉御座り舛ふ 何卒私の方へ来て被下い そなたが其様におしやる二依て行まい物でも無いが、此蝸牛は。藪を出て里へ行二は只は行かれぬ何として御供致舛ふぞ 此【十一オ】蝸牛は囃子物が好で囃子物で往たならば夫二乗じて参るふぞ 幸私は囃子物は得物で御座る何と云て囃し舛せふぞ。 別二六ヶ敷い事でも無い。雨も風も吹かぬに出なかつた割ふ／＼と【十一ウ】さへ云へば身共がでん／＼虫々／＼と云て浮きにういて参ふぞ 是は近頃面白そうな事で御座る 先囃いて見舛せふ 夫が能かるふハア引（扇ニテ拍子打乍諷フ）雨も風も吹かぬに。出

なかつた割ふ／＼。夫よく／＼【十二オ】うきに浮いて囃さしめ ハア（兩人共ウキ出ス此時主立ツ）「夫よく／＼扱／＼うつけた者じや」雨も風も吹かぬに出なかつた割ふ／＼（此跡ハ舞一段）○印ヲ「主」（一ノ松）最前太郎冠者に蝸牛を取りに遣いて御座るが。い斯おそう御座る二依て。道辻見二参るふと存る何をして居る事じや知らぬ（下舞台へ入ヲ見是は如【十二ウ】何な事あれにいか目の山伏と散々浮れている太郎冠者（下諷の間ニ呼）（○印）（仕手舞一段有）ハア雨も風も吹かぬに、太郎冠者 出なかつた割ふ／＼（▲印ヲ（此跡ハ二段舞）ヤイ太郎冠者（太郎 主ヘ向ヒ）エイ頼ふだ御方は是の蝸牛を求めて御座る追付是へ同道致舛る【▲】（仕手舞二段目）【十三オ】（舞終ツテ太郎ノ左ノ袖ヒキ）「仕手」囃さぬかいやい／＼ハア雨（又ウカレル此諷の間主詞有）も風も吹かぬに出なかつた割ふ／＼（此跡ハ三段目舞△印ヲ）是は如何な事 又浮かれおツた太郎冠者／＼ ヤイ太郎冠者（太郎主ニ向 何事で御座る あれば山伏でまいすじやはやい すれば【十三ウ】眞のまいすで御座るか 中／＼ 夫ならば打ちやくのして遣り舛せふ 夫が能かるふ（太郎ハ仕手舞ノ内ニ目付へ行待居ル）（△印ヘ）（仕手舞三段目）能そこな人。何事じや。此方（扇フリ上ル）最前蝸牛とはおしやれ共山伏でまいすじや【十四オ】げな。何んのまいすで有るふ 身共は（右手出シ）今の夫レ（ヨル）おう（同）夫レ（同）おふ む引し虫引ハア（太郎又ウカレ出ス）雨も風も吹かぬに出なかつた割ふ／＼。（此跡ハ四段目舞）□印）是は如何な事又浮れおた 太郎冠者。／＼（太郎ノ右手引ヨセル）ヤイ太郎冠者【十四ウ】何事で御座る あれば山伏でまいすじやと云に ハ、ア引すれば眞の山伏で御座るか。中／＼此度は兩人してちようちやくのして遣るふ。夫が能ふ御座り舛せう 是へ出い 心得舛した（主目付柱ヘ太郎次ヘ立）【十五オ】（□印ヘ）（仕手舞伍段目）ヤイ（扇フリ上）己は山伏では無いか。ヤイ己はまいすでは無いか。（仕手兩人ヲトクト見テ）何ん

のまいすで有ふ（フリ返リ）身共は（大臣ヨリ大小前迄見廻シ左手ニギリ コブシ）

此大數に年を得たる（主へ打かへり）でん／＼虫々「主」（ラドロキ一足上リ）

是は何とする（太郎へモ右手同断）でん／＼虫々【十五ウ】是は（同断）何

とする（右手出タルマ）でん／＼（片シギリニ跡ジサリ 拍子）むし／＼でん

／＼むし虫（兩人ウキ出ス仕手笑）（扱々うつけた者じや）ハア雨も風も吹

かぬ二出なから（主仕手ノ右へ廻リ太郎ノ跡へ付）打わろふ／＼でん／＼虫

／＼ハア引（太郎仕手ノ左へ廻リ仕手ノ跡へ付リ）雨も風も吹かぬに出なから

打わろ／＼でん／＼虫々（三人カタシギリニテ入ル 形ハ記ス）【十六オ】ノ

／＼「兩人」ハア雨も風も吹かぬに出なから打わろ／＼（幕へ入）

（スベテ太郎か諷の間仕手モウキ乍夫／＼（笑）扱／＼うつけた物じ

や等云べし太郎も仕手ノ間夫ヨ／＼と云べし）

「仕手」

一厚板 一常水衣

一狂言袴ク、リ 一鈴懸

一と巾 一草の実ヅ、

一ほら貝 穂付 一腰帶

一小刀

「主」

一長上下 出立

「太郎」

一半上下 出立【十六ウ】

茂山社

橋本治夫

【裏表紙】

翻刻『神鳴』

橋本  
之印

大蔵流

神鳴 六義

橋本治夫【表紙】

大正十四年八月

アド 医師【見返し】

神鳴

次第 藥種も持たぬ敷くすし／＼きわたや頼みなるらん是は都に住居致す医師で御座る此頃は都に典藥の頭杯と申て上手な醫師が数多御座るニ依て我等如きの敷くすしには脈も取らせ舛せぬ【一オ】承れば吾妻は医師がふつていなと申舛ニ依て只今より吾妻へ下ふと存る 先ぞろり／＼と參ふイヤ誠ニ皆人は花の都へ／＼と登らせらるゝに某は花の都を振捨て吾づまへ下ると申は近頃本意無けれ共渡世の事なれば是【二ウ】非も無い事で御座るイヤ是は眇／＼とした廣い野へ出たが是は何と云のじや知らぬ ハ、ア引此当り迄參れば俄に空がかき曇り其上上が鳴る様なピツカリ ア、桑原／＼此様な所に長居は無用じや少しも里近くへ參ふ何卒里【二オ】へ出る迄何事も無ければ能ふ御座るがピツカリ／＼ガラリ／＼ア、恐敷や桑原／＼／＼ピツカリガラリ／＼／＼どう／＼／＼桑原／＼／＼あ痛／＼ハ、アけふは心面白ふ鳴渡たがチト風ト雲間をはづいて此様な廣いひよう／＼とした野へ落た当り【二ウ】にかけ上る木も無し 是は先何と致そふ ヤイ夫に居るは何物じや 是はいしで御座る 何じや石じや ハア石が物を云かイヤ人間の病をなす醫師で御座る ム、すれば敷医者か 左様で御座る身共は又雷じやい

やい ハア【三才】はいもう致いて御座る けふは心面白う鳴渡たがフト風と雲間をはすいて此所へ落腰の骨をした、かに打た 汝人間の病をなをすくすしならばそれがしの療治をせい イヤ私は是迄人間の病をなをいては御座れ共未だ御雷の療治を【三才】致た事が御座らぬ 己人間の雷のと其連を云てせすば引さいて呉う アイタ／＼ア、致舛る／＼。早ふせい、夫ならば先御脈を取舛せふ脈とは 惣じて人間の脈は左右の手で見舛るが御雷の脈は頭脈と申て頭て取【四才】事で御座る 己夫程能う知て居乍サア／＼早ふ見て呉い畏て御座る 必ひからせらる、なヲ、ひかる事では無い（脈を取る）何とする。ハア殊の外の邪氣で御座る 其上御雷ニは御持病と中疾が御座る ヲ、中風／＼随分と落る事じやに【四才】依て中風も有ふ サア／＼早なをいて呉い 扱宿元ならば能い御薬も数多御座れ共途中の事で御座るに依て針をせねば成舛せぬ。針とは是で御座る。夫を何とする是を痛む所へ立舛る いかなく其様ナ恐敷い物か 何とし【五才】て受らる、物か 人間でさへ受舛に。御雷が受させられいではチト御非怯に御座るふム、人間でさへ受る物を。身共じやとて受られぬ事も有まい夫ならば病まぬ様に立 畏て御座る先御よこに成らせられい。心得た。エイ【五才】／＼ヤットナ サア／＼早ふ立い必鳴らせらる、な ヲ、鳴る事では無い早ふ立い 此辺りで御座るか。 ヲ、其當りじや此辺りで御座るか。 ヲ、其當りじや。立舛るぞ 早ふ立いクワツシ／＼あ痛／＼。クワツシ／＼あ痛／＼。早【六才】ぬけ／＼ 只今ぬき舛ぞあいた／＼其様に動かせらる、と針がまがり舛る 早ふ取れ／＼ 只今ぬき舛るぞヤットナ あ痛／＼ 扱何とで御座る。 ム、大分心持能ふ成た。夫ならばこちらへも立舛せふ。最早いや【六才】じや イヤ留針と申事をせねば成舛せぬ 夫ならば今の様に痛まぬ様に

立い畏て御座る 此方も又今の様に動かせられては針がまがり舛る程に必動かせらる、なヲ、動く事では無い 又御横に成らせられい 心得た【七才】エイ／＼ヤットナ。サア／＼早ふ立い心得舛した 必ひからせらる、なヲ、ひかる事では無い 早ふ立い此辺りで御座るか ヲ、其辺りじや 此辺りで御座るか。 ヲ、其辺りじや 立舛るぞ 早ふ立いクワツシ／＼。あいた／＼早取れ／＼。【七才】其様に動かせられては針がまがり舛る今取舛るぞ早とれ／＼ヤットナ。あいた／＼。扱何とで御座る。 ム、殊の外楽に成た 夫ならば立て見させられい 心得た 慮外乍ら手を取てくれい 畏て御座る サア立せられい。エ、【八才】静にせい エイ／＼ヤットナ何と立舛したか。まんまと立た荒嬉しや更は天乗致ふ ア、申先待せられい 何と待とは かわりを置て行せられい 替りとは 惣じて人間の病をなをし舛れば夫／＼薬礼を呉舛るお雷【八才】にも何卒薬礼を被下い 是は尤じやが今も言通りフト風と雲間をはずいて落た事じや二依て何も持合せぬ 許いて呉い イヤ私も是で渡世致す者の事で御座る二依て是非共薬礼を下されい 扱／＼是は苦々敷イ事じや喝【九才】鼓を遣れば不自由也 此撥を取らせふ イヤばちも結構ニハ御座れ共やはり御足がほしう御座る 扱／＼苦／＼敷い事じや是は先何と致そふ 能い／＼その所を云て置け。近日夕立の節落て礼二行う イヤ夫ニは猶／＼迷惑に御座る【九才】能い／＼惣じて人間と申者は夫／＼望の有物じやが汝は何も望は無い。夫ならば雨風は御雷の御自由に成舛るか ヲ、降そふとてらそふと身が俣じや 夫ならば。此頃人間は早損のと申ては薬礼を呉ず又水損のと申ては薬礼【十才】を呉舛せぬ二依て此後は早損水損の無い様に護て被下い。夫は一心安い事じやして毎迄護て取らせふぞ 毎迄も守て被下い 其様ニ限りの無い事は成らぬ 一年か二年護て取らせふ

かイヤ申一年二年は夢の間で【十ウ】御座る 何卒萬々年が間守  
 ヤ／＼其様に夥敷は成らぬ能い／＼某が心得を持って八百年が間護て取  
 せふ 夫は有難ふ御座る 迎もみ事ニ汝を典薬頭に祝て取らせふ。猶／  
 へで御座る 此由目出度舞上りに致そふ 夫は【十一オ】とも角で御座  
 る。降つ照ひつ／＼八百年が其間早損水損もあるまじや。御身ハ薬師の  
 化現かや 中風をなす。くすしを。典薬の頭と《下》言すて。又鳴  
 神は上りけり／＼、ピツカリガラリ／＼、【十一ウ】  
 ア、桑原／＼／＼。

一雷面 一赤頭

武悪とても

一厚板 一下袴

一脚伴 一法被

厚板肩折ニテモ

一喝鼓 一腰帶

バチ共

一能力頭巾 一変哲

一小島着附 一狂言袴

一無地腰帶 一扇子

一針

【十二オ】

茂山社中

橋本治夫

橋本

氏蔵

【裏表紙】

# 翻刻『縄綯』

橋本  
氏蔵

〔内神文小名狂言〕

大蔵流

縄ない 六義

橋本治夫

【表紙】

なわない

扱私が此縄を綯舁る内に誰殿の内の様子を話いて聞かせ舁ふ夫が能かろ  
 ふ 惣じて人にはそふて見よ馬ニは乗て見よ【一オ】と申舁るがアノ  
 誰殿と云人は根性の悪敷人で御座る此後は御付合はふつ／＼と御無用に  
 成たが能ふ御座り舁ふ 夫は又なぜに先私があれへ参るや参らぬにヤイ  
 太郎冠者そちの来るを待ていたと申され舁る イヤ何からは存舁せぬが  
 是へ御文が参て御座ると【一ウ】申て差出舁ると文迄ニも及ばぬ事を扱  
 へ念の入た事じやサア／＼斯通れと申され舁る私も合点の行かぬ事と  
 存じ御返事でも御座らば承て参舁ると申て御座ればア、すればそちは何  
 をも知らぬか 何をも存舁せぬ。夫ならば有様を云て聞かせふ【二オ】  
 有様はそちの頼ふだ者と例の一勝負したれば某の仕合が能ふて金銀は申  
 ニ及ばず汝迄も打勝たけふよりしては某が方の太郎冠者じや程にそふ心  
 得と申され舁る 然で私もイヤ左様な事なれば頼ふだ者が何とか申舁ふ  
 物を何共承はらず【二ウ】に参り舁たに依て往て問て参り舁せふと申て



御座ればア、こりや／＼行には及ばぬ そちは頼ふだ物の手跡を知ているで有ふ如何にも存て居舛る。 夫ならば是へ寄てとくと見よ鳥目のかわり一太郎冠者を進じ候と申て此方の御文を見せられ舛る【三才】私もそばへ寄て見舛ると疑ひも無い此方の御手跡で御座る私も最早是非も無い事と存じ私は奉公人の事で御座る二依て何れで御奉公致すも同じ事で御座るつと不調法者では御座れ共随分御目永ニ遣ふて被下と申て御座ればヲ、夫【三才】は能い心懸じや随分目を懸て遣ふてやろふぞ扱奉公人の只居ると云は悪敷物しや早速乍山一ツあなたへ遣に行けイヤ申し山一ツあなたへ使にゆけで御座る 定て往たて有ふ能ふ舛舛ふぞ私は持病に脚氣が御座て 山坂舛へは【四才】馬上で無くば得参り舛ぬと申て御座れば馬上で行ならば身共が行く夫ならば内に居て縄を舛へイヤ申此得物の縄を舛で御座る 無綯たて有ふ（笑） 能ふ舛舛せふぞ私は終に縄舛綯た事は御座らぬと申て御座ればそちは【四才】縄は得物じやと聞たか イヤモつうツと不調法でたま／＼なへば左り縄でなんの御役にも立ませぬと申て御座れば 何は成らぬかは成らぬと奉公人の只いると云事が有物か夫ならば内にいて水を汲と申され舛私もむかと致し舛た【五才】に依て能ふ誰殿此太郎冠者は賤敷い御奉公は致せ終に水舛汲た事は御座らぬと申て御座れば夫ならば最早能いわいい 果能ふ御座らいで何の役にも立た、ぬ奴す込ふでいよ ア引（笑） 惣じて人は門出が大事じやと申舛るが【五才】殊の外腹を立て出て行かれ舛たが扱は此方のお御仕合と申者で御座る 其通りじや（笑） 扱も私も御臺所につくくりとしており當りの様子を見廻し舛ると誰殿も以前は随分勝手能ふ暮されたと見へて家居もつき／＼敷ふ竈の【六才】数も多御座るがチト身代がまわつたと見へ舛て釜の下は毎ひを焚た事やら皆々蜘蛛の巣計で御座る（笑） 其上貧敷い中へどうでも夫婦中が能いと見へて夥敷い子せがれが御座ツて

あれはどうでも年子と見へ舛て如【六才】何様拾二三を頭と致し七八人も御座るふかあその角から二ヨロリこちらの角からも二ヨリ／＼と出て参り舛して何が遣ひ付けぬ人を遣ふ事なれば爰へは湯を呉いかしこへは茶を呉い水を呉いと申舛る夫を夫／＼あてがい舛るとヤイ某は【七才】茶と云たに水を呉た湯と云たにみずを呉たあつて舌を焼たぬるふてむせた。ア、あの大勢の子恠にせびらかされう物なれば百年の壽命も一日と縮ると申物で御座る（笑） 定てそふで有ふ扱皆蜘蛛の子ちらす如くに【七才】どれへやら参り舛た二依て私計又造りとしており舛ると。奥の方から山鳩のうめく様な呼立して太郎冠者／＼と申て呼者が御座る誰が呼かと存じ後を斯う振向ひて見舛るイヤ申誰殿の御内儀が出られ舛て御座る 何御内儀が【八才】中／＼あの御内儀は殊の外の美人で人ニ逢さぬと聞たが何美人／＼／＼（笑） あれは美人で無ふてしツかい鬼人じや（笑） 先良の形ちを申そふならばひたひは前へヒヨイと出て目はどんぐり目で口は耳ぜ、込くわツとさけて御座に【八才】て夫へ紅をさした所は猿が人を喰た様な（笑） 其上鼻は有たか無かたお、夫／＼くる菓を二ツにボンと碯た様な物が鼻と思敷所にチヨンポリ（笑） 其上氣の病でもわずらわれたと見へ舛て如何様物にたとへて申そふならば【九才】鼠の尾なら程も御座るふか。かへるの尾程ならでは無いシヨボ／＼とした髪をくる／＼と巻てこうがいまげ（笑） 扱又腰<sup>③</sup>い所へけわい粧化を召された所しツかい鴨瓜が夕立に逢た様な（笑） ア、何共見苦敷面で御座る其上あれはどうでも誰【九才】殿の血の餘りと見へ舛て稚いを懷いて出られ舛してヤイ太郎冠者奉公人の只いると云事が有物か此子の護をせいと云われ舛る私も迷惑な事と存じ只今迄の頼だ者には稚いが御座らぬに依て終に御子様の御守を致た【十才】事が御座らぬと申て御座れば。己子の守をせぬのすると云事が有物か泣かぬ様に守をせよと申て

私へ其子を突付て俣奥へ這入らる、後姿を見て御座れば。そのまゝ、のたてうすへこもを巻た様な（笑）其上あれ【十ウ】はどうでも左の足が長いか但右の足が短いか片やヘチンガリくく（笑）其俣奥へはいられ舂たに依て私も其子を斯けん上物を見る様に抱上て見舂ると惣じて稚い子は愛ら敷い所が御座るが能ふ御内儀に似られ舂して。さ【十一オ】計憎駄な面付で御座りし。頭ニは何やら物が一盃出来て御座て尺八の様な青ばなを二本たたりと流しさもむさくる敷ふ育て御座るが匠は稚い者で御座る私の只を見てはニコリくくと笑舂る。其笑い只を見れば腹が【十一ウ】立てく成舂せぬニ依て片屋へつれて参り股をふつりとつめつて御座ればいやも泣ふ事か泣まい事かワアくくくと言て泣舂る其泣聲が奥へ聞へては成まいと存じおふくくくしとの和子を誰がくくくと申て御座れば又ニコ【十二オ】リくくと笑舂る其笑ふ只を見れば腹が立てく成舂せぬニ依て此度は裏口へ連て出てにぎりこぶしを以て頭をくわツしと叩ひて御座るれば又ワアくくくと言て泣舂る泣けばすかし笑へは叩く叩ひてく彼誰殿の思ひ【十二ウ】を此小忤へ持て参て御座れば其泣く聲が奥へ聞へたと見へ舂て彼ひよつとぬけの夜沙が飛て出てヤイ引太郎冠者秘蔵の子をなぜ泣しおたと云われ舂るニ依てイヤ最前も申通り是迄の頼ふだ物ニは御子さまが【十三オ】御座らぬ程に御子さまの御守を仕付た事が御座らぬニ依て定めて人見知りを被成た物で御座ろふと云て御座ればイヤく其子ニ限て人見はせぬ己の守の仕様の悪敷いのじやこちへおこしおろと云て其子を引たくツて私【十三ウ】をねめられた其時の其只は其俣の鬼瓦で御座る何んの鬼瓦。ハア是は能ふ御出被成舂た何能ふ御出被成舂した己能ふもく某が女共の悪口を仕おツたなくア、イヤあれはお隣りの御内儀の事で御座る【十四オ】其上秘蔵の忤を能ふもく打擲しおツたなく。ア、イヤあれもお隣の稚児様の事で御

座れ此方の子忤奴では御座らぬ（笑）未だ其連な事を言ふ己どちへ行ぞ。ア、許ひて被下いくくくアノ横着者誰そ捕て呉ひ遣る【十四ウ】まいぞくくくく

一半上下出立

一長上下出立

一長上下出立

一晒布壹丈二尺縄による

一奉書一枚【後見返】

茂山社中

橋本治夫

橋本

氏蔵

【後表紙】

翻刻『金津』

大蔵流

金津 六義

【表紙】

大正十五年六月

親

【見返し】

もチト下心有ての事で御座る先金法師を呼出し申付ふと存るイヤ能く

金法師おりやるか居さし舁るか。呼せらるゝは何事で御座る。チト用の事か有先斯通さしめ。心得舁した 扱そなたを呼出すは別成事で【一オ】無片田舎の者に。御地藏を一舁作て遣ふ約束をした程に和御料地藏二成てくれさしめ。畏ては御座れ共あちへ往たならば戻らるゝ事は成舁るまい。夫は氣遣下さるな能時分ニ某が迎ひにいて。連て戻ふぞ 其儀ならば【一ウ】参り舁ふが私かほしい物を被下るゝか ヲ、何成共ほしい物を遣ふが何がほしいぞ。弁慶の人形がほしい御座る。安い事弁慶の人形を遣ふもう無い。ゑのころをもこふて被下い。中／＼ゑのころをもこふて遣ふ程に先是【二オ】寄て身拵をさしめ 畏て御座る 先此頭巾を着さしめ 心得舁した 衣をもお着やれ 畏て御座る 此尺杖をもかたげて行かしめ。心得舁した 一段と能ふおりやる立しめ。畏て御座る 中／＼能ふおり【二ウ】やる追付て因幡堂へ往ふサア／＼おりやれ／＼ 参舁る／＼ 扱あちへ往たならば定て是／＼の物を備るで有ふが必らず喰し舁な 畏て御座る。其上物を云まいぞ 心得舁した。イヤ何かと云内早因幡堂じや先夫ニ待しめ。【三オ】畏て御座る 扱是に腰をかけさしめ 心得舁した 能時分ニ迎に行程に必ず物を云まいぞ 何が扱畏て御座る必ず迎ニ来て被下い。心得た能々田舎の見ゆる時分じや迎ひニ参ふ。けのふ佛師殿と約束の時分て御座る【三ウ】急ひで五条の因幡堂へ参ふと存る エイ田舎の。エイ佛師殿何と御地藏は作て被下舁たか ヲ、如何にも作て置た。此清堂ニ荒菰が懸て有程に夫をあげて拝ましめ 早出来舁たか 中／＼ちやツと往て拝ましめ。夫ならば往て拝み【四オ】舁ふ 夫が能かるふ 扱も／＼都と申所は重宝な所で御座るけのふ頼ふだ御地藏が早出来させられたぞふな。されはこそ是ニ荒菰がたれて有先荒菰を上ふサラ／＼ハ、ア殊勝ぞふニ出来させられた。先拝を致そふ【四ウ】ハ、ア扱／＼うるわ敷

う出来させられた。更は負舁て参ふ 更は急で罷帰ふイヤ誠定めて皆の者がけふか明日かと待兼て居るで有ふ戻て此由を咄いたならば懽悦ぶて御座るふ。イヤ何かと云内早戻り付た更は御地藏を爰元へすへ舁せふ【五オ】是で一段と能ふ御座る更は皆の衆を呼出して拝を致させふと存る能／＼何れも御座るか 是ニおり舁る まんまと御地藏を作てもろふて負舁して参た急ひであれへ往て拝を召れ。心得舁した 扱も／＼殊の【五ウ】外うるわ敷能御地藏で御座る 其通りで御座る 扱此所の名に寄て金津の地藏と號け舁せふ。能ふ御座り舁せふ 先御地藏へ香花を備へ舁せふ 早ふ上させられい。金津の地藏へ香花をこそ手向け【六オ】香花はいや也満仲をこそハ喰たけれ。イヤ申御地藏の物を仰られて御座る。左様で御座る 満頭が喰度と仰られ舁る 左様ニ仰られ舁る 扱々あらたな事で御座る急で上させられい。心得舁した金津の地藏へ満頭【六ウ】を社は参らせけれ。能ふ呉た古酒こそは吞たけれ イヤ又酒か呑度と仰られ舁る 左様で御座る 早ふ上させられい 心得舁した。金津の地藏に古酒をこそは手向け。能ふ呉た楽敷ふなして取せふぞ【七オ】ハア引有難ふ御座る申／＼ 此古酒の餘を頂舁せふ 夫が能ふ御座り舁せふ 先こなた参れ。是は慮外で御座る 此方も参れ 是へ被下い 申／＼御地藏の古酒ニ酔せられたと見へて眠け舁した。【七ウ】中／＼殊の外ねむらせられ舁る 生佛で御座るニ依て御地藏チト浮し舁ふ 是は能ふ御座り舁ふ 何れも是へ寄らせられい 心得舁した金津の地藏のゆるいだを見まいな／＼ ゆるぎ度ふは無けれども且、那の仰ならば更はちと【八オ】ゆるごよ 金津の地藏の立を見まいな／＼ 立度ふは無けれども且、那の仰ならば更はちと立ふよ。金津の地藏の踊たを見まいな／＼ 踊り度ふ無けれども且、那の仰ならば更はちと踊やふ 金津の【八ウ】地藏の踊たを見舁いなく 踊り度ふは

無けれども旦那の仰ならば更ばちと踊よふシャギリ止イヤ  
但し浮持て囃乍幕入も

有可し此方當時は有様走

仕手入立衆入て一番留二田舎

者も浮入可し【九オ】

子方用

一 半上下之出立 肩めぎ<sup>ママ</sup>

替<sup>ニ</sup>扁綴<sup>ト</sup>角頭巾錫杖持つ

一 半上下出立

一 長上下出立

但し狂言上下二ても

一 長上下出立

一 葛桶成可くは小さき方吉

一 錫杖 一竹ほうじにてまく

長さ仕手の御程【九ウ】

橋本治夫【裏表紙】

## 注

(1) 坂本清恵・加野友理・野見山優・野中くれあ「大藏流茂山家狂言台本の翻刻と紹介」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二二 二〇一六年 これを「とする」。

坂本清恵・川上真由子・林美樹・シラージ・アンドレア「大藏流茂山家狂言台本翻刻」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二四 二〇一八年 これを「とする」。

(2) 笹野堅校訂『大藏虎寛本能狂言下』岩波書店 一九四五年

(3) 「變」と翻字したが、「口」偏に「変」の字

坂本清恵（日本文学科教授）・飯田むぎ（文学研究科博士課程前期二年）・

杉本さくら（文学研究科博士課程前期一年）

Typeset Versions of Shigeyama Family Kyogen Scripts of the Okura School: “Fusenaikyo,” “Kagyū,” “Kaminari,” “Nawanai” and “Kanatsu”.

SAKAMOTO Kiyoe, IIDA Mugi, SUGIMOTO Sakura

[Abstract] In the 2014 academic year, the Department of Japanese in the Japan Women's University Faculty of Humanities acquired 27 volumes of kyogen scripts from the Shigeyama Sengoro family of the Okura School of the traditional form of Japanese comic theater known as kyogen. One new volume was purchased in 2023.

Typeset versions have been produced of five of these works: “Fusenaikyo,” which bears the signature of Shigeyama Masakazu and the “Shigeyama Library” seal, and “Kagyū,” “Kaminari,” “Kanatsu” and “Nawanai,” which bear the signatures and seals of Shigeyama members and of Hashimoto Haruo.

Shigeyama Masakazu, who is Shigeyama Sensaku III, put the 184 kyogen works that are presently in the Shigeyama Sengoro family into organized order, and like them, the texts here constitute materials documenting the kyogen works of the Sengoro branch of the Shigeyama family from the mid- to late 1920s.

[Key Words] Kyogen Scripts of the Shigeyama Sengoro Family, “Fusenaikyo,” “Kagyū,” “Kaminari,” “Nawanai,” “Kanatsu”